

# 個が生きる生活科単元の開発

弘 法 泰 英

## 1. はじめに

本校では、昭和63年度から、新教科である生活科の全面実施にふみきっている。そのため、生活科の単元は、いままで本校が積み上げてきた総合学習や他校の先行的実践をもとに新たに開発していかなくてはならなくなった。その単元開発のバックボーンとなっているのが、「個の生きる授業」である。

「個が生きる授業」とは、どのような姿の授業なのであろうか。それは、まず少なくとも授業のうえで、どの子どもたちも生きていなければならない。生きているとは、個々の子どもたちが、学習対象に対して十分活動し、友だちと十分ふれ合い、授業のなかで満足感・充実感が味わえるということであろう。そのためには、まず個々の子どもたちがめあて意識を持って、授業に真剣に取り組めるような授業を構成していかなければならない。その上、個々の子どもを取り巻く集団の中で、個々の子どもがお互いに支えられ認められるということも大きな要素となってくる。つまり、「個が生きる授業」とは、これらの授業内容そのものの問題と個を取り巻く集団の問題の二面から、考えなければならないであろう。

## 2. 研究課題

そこで、「個が生きる授業」が成立するためには、どのような手だてを講ずればよいか、授業内容と集団という二面から、授業内容では学習のめあてづくり、集団では個と集団のかかわりという点に視点をあてて、次のような研究仮説をたてた。

### 仮説1

学習のめあてづくりの場の構成を工夫するなら、子どもたちは確かなめあて意識を持って満足感と充実感を味わいながら学習に取り組むであろう。

### 仮説2

集団に支えられるような授業を構成すれば、集団の中で子どもたちは満足感と充実感を味わいながら学習に取り組むであろう。

そのための方策として、つぎの3点を考えた。

### 仮説1に対する方策

単元最初のめあてづくりの場を多面的な方法で、具体物を使用し、インパクトのある場を構成する。

### 仮説2に対する方策

集団とのかかわりを多面的にし、多くの子どもたちと接するような授業を構成する。

### 仮説全体に対する方策

仮説1・2を評価する評価方法として、子どもたちの自己評価や生活日記を利用し、またそれを指導の形成評価ともする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 単元導入時におけるめあてづくりの場の工夫

子どもたちに意欲を持って学習するためには、子どもたちが単元に対してはっきりとしためあて意識を持たなくてはならない。そのためには、子どもたちが、最初にどのような形で学習対象に出会うかが問題となる。つまり、子どもたちの最初に学習対象に出会う形いかにによって、その後の学習に対する意欲が大きく変わってくる。

低学年の子どもたちに、はっきりとしためあて意識を持たせてやるためには、インパクトのある方法で、単元のめあてを知らせてやる方法が必要である。その方法としては、次のような物が考えられる。

- ①実物提示………実物・完成物を見る，遊ぶ，味わう
- ②他との交流………下級生・同学年・上級生・級友に伝達，プレゼント
- ③映像利用………TV・スライド・映画・VTRを見る

#### (2) 集団とのかかわりを多面的にした授業構成

個が生きるためには、もう一つ側面である集団とのかかわりが重要となってくる。つまり集団に支えられ認められることが大切になってくる。そのためには、集団とのかかわりを多くし、しかも多面的に求めなければならない。その授業を構成する集団としては次のようなものが考えられる。

- ①学級集団
- ②学年集団
- ③多学年集団

以上のような集団の中で、お互いにお互いが必要である場面を構成して、お互いに支えられ、お互いに認めあう意識を育てていく。

#### (3) 授業評価方法の工夫

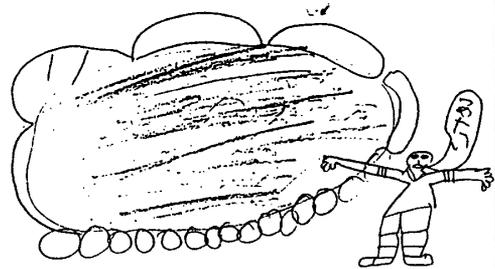
この目的のために自己評価を取り入れていく。この自己評価によって、子どもたちが自分自身を振り返るとともに、指導者にとっては、授業評価をしようとするものである。具体的には、発見カードの「今日の勉強は楽しかったですか」の項目と本文の記述内容である。右の図のように、たのしかった・ふつう・おもしろくなかったの三段階の評定尺度で評価している。子どもたちにとって、その授業に対して満足感・充実感が十分であれば、また周りの集団に支えられ認められた授業であれば、子どもたちは、その項目に、「たのしかった」と評価するであろう。

また、授業評価の方法として、子どもたちが日々書いている生活日記の分析も利用したい。この生活日記は、授業と離れたところで、かなり正直に自分自身の心情を書いているので授業評価にも利用できる。

### 4. 研究の実際………第二学年の単元を通して

#### (1) 単元導入時におけるめあてづくりの場の工夫

自己評価カード

ぼくのはっけん わたしのはっけん		
11月22日 水ようび 名まえ _____		
きょうのべんきょうは		
たのしかった	ふつう	おもしろくなかった
		
ぼくは、このいるいけの水のおんど		
をくらべました。つめたかったです。ぼくは、		
冬になったら、どれぐらいのおんどになる		
だろう		
と思いました。		
でも、水と氷の方がつめたいです。		

① 実物提示の方法……「やさいをつくろう」の単元の場合

	(38名)
・えだまめ	14名
・ミニトマト	10
・きゅうり	5
・にんじん	3

この単元のめあてづくりの方法としては、次のような方法をとった。この単元では、事前調査として、どんな野菜を育ててみたいか調べてみた。結果は左の表の通りである(多い順に四位まで)。この中から栽培期間・教材性を考慮して、えだまめ・ミニトマト・きゅうりと、一年生から栽培を繰り返してきた、はつかだいこんを素材として取り上げた。



ミニトマト・枝豆を食べる

た。

そこで、単元導入時・第1時の学習は、えだまめ・ミニトマトを実際に食べることを通して、めあてを喚起させる方法を取った。この二種類の野菜は、スーパーで購入し、えだまめはゆで、ミニトマトはそのままで食べた。その後、「これらを自分たちで育てて、食べてみませんか。」と投げかけた。そうすると、一斉に子どもたちの口からは、「育ててみたい。」という言葉がでてきた。

② 他との交流をとる方法……「くさや木のはであそぼう」の単元の場合

この単元では、「一年生となかよくなるシリーズ」の一つとして計画した。単元導入時・第1時は、直接に一年生に「遊びを教えてあげる。」と約束する場面として構成した。ここでの活動時間は、給食の時間を使用した。



一年生との会食

活動内容は次のようにした。本学級(2年2組)と兄弟学級である1年2組とで、男子は男子、女子は女子でペアを組んだ。そしてクラスの半数、お互いの教室に行き、そこでペア同士机を並べて給食を一緒に食べた。そして、いろいろな話をするなかで、「一緒に遊ぼう、遊びを教えてあげる。」の約束を一人ひとりがし、個々にそれを自覚させる方法をとった。この約束を、本単元のめあてとした。その際、事前に担任と今後の展開を打ち合わせておいた。

これと同様な方法で、「やさいをたべよう」・「おもちゃをつくろう」の単元も展開している。

③ テレビ番組を利用する方法……「おにぎりパーティーをしよう」の単元の場合

この単元の第1時は、NHK学校放送・みんなでアタック「おにぎりパーティー」(4月6日放送)のVTR視聴を導入とした。この番組は、新しい友だちを作って仲良しになるために、自分たちのアイデアと工夫でおにぎりをつくり、パーティーをひらき、みんなで楽しむという内容である。

15分のTV視聴の後、「どんなところがおもしろかった。」「どんなことをしてみたい。」と投げかけていった。そうすると、子どもたちは、「おにぎりをつくりたい。」「おにぎりパーティーをしよう。」とみんなの気持ちは一気に高まっていった。



TV視聴

## (2) 集団とのかかわりを多面的にした授業構成

### ① 級友とのかかわりにおいて……「くさや木のはであそぼう」の単元の場合



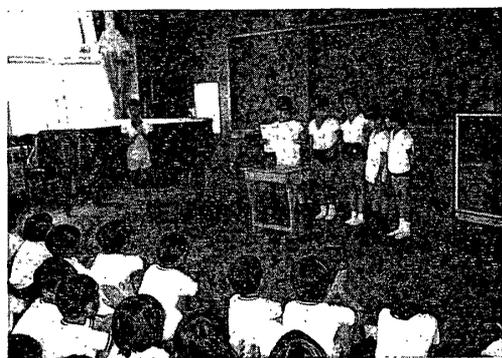
くさぶえをふこう

級友とのかかわりについて、次のことを大切にしました。「級友に教えてもらう、級友に学ぶ。」をベースとした授業構成を考えた。「くさぶえをふこう」(第二次・第1時)の活動でいえば、子どもたちにとって草笛は、少々抵抗があり、初めはなかなか鳴らない。そこで、教師がすぐに援助したり助言するのではなく、すでに鳴った子どもが、まだ鳴らない子どもに教える。まだ鳴らない子は、鳴った子に聞きに行くような指導をしていく。この単元では、うまくできた子を名人と称して、その名人に教えてもらう、

名人は積極的に教えるというように、子どもどうしが積極的に教え合う場面を構成した。この単元においては、第二次(3時間)の活動は、すべてこのように構成した。

### ② 一年生とのかかわりにおいて……「やさいをたべよう」の単元の場合

子どもたちに学習の中で、やる気を起こさせ、上級生としての自覚と活躍の場を与えるねらいで、単元のなかに、一年生とかかわる場を設けてみた。具体的には、第二次の第5時で、一年生のパートナーに招待状を書き、第7時で実際にそのパートナーをパーティーに招待して、同じ机で自分たちが作った料理を食べ、出し物を観てもらおう。この活動のなかで、パートナーが二年生を慕って頼ってくる。そういう行為の中で、二年生の子どもたちは、二年生としての自覚と自信を持って、学習に参加してくるようになる。子どもたちは、こういった一年生とのかかわりを大変楽しみにしている。



やさいパーティー

同様な活動は、「くさや木のはであそぼう」や「おもちゃをつくろう」の単元でも実施している。

### ③ 同学年とのかかわりにおいて……「おにぎりパーティーをしよう」の単元の場合



おにぎりパーティー

子どもたちの心情を育てていくのは、級友とのかかわりだけではない。学年の友だちも大切な要素となってくる。他クラスの友だちといっしょに活動して、認められること、また相手を認めること、これらによって、単元の活動が活発になりそして広くなるだけでなく、今後の活動の大きなエネルギーとなるものである。

具体的には、第二次の第3時で、学年三クラス合同でパーティーを行う。ここでは、担当学級が出し物をだし、各自が作ったおにぎりをなかよしグループのみんなで交換して食べる。自分の作った物を友だちが食べてくれる、また友だちの作った物を自分が食べる。その行為のなかで、お互いに通じあい、新たな信頼関係と友情が生まれてくる。

## 5. 考察

### (1) 単元導入時におけるめあてづくりの場の工夫

単元導入時におけるめあてづくりの方法には色々あるであろうが、いずれにしてもここで子どもたちにめあてをはっきり意識させないことには、以後の学習への意欲は存続しない。

①「野菜をつくろう」の実物提示の方法、とりわけ実物を食べる方法は、自分たちも育てて食べたいという意識を大いにかき立てた。この時間を子どもたちの自己評価カード「ぼくのはっけん わたしのはっけん」でみると、次のようになる。

「きょうのべんきょうは、たのしかったですか。」の項目 (39名)

たのしかった	34名	ふつう	5名	おもしろくなかった	0名
--------	-----	-----	----	-----------	----

「先生へのおてがみ」の記述を分析してみると、次のようになる。

野菜を植えたい	11名	枝豆を植えたい	4名
ミニトマトを植えたい	4名	早く野菜を植えたい	3名
きゅうりを植えたい	1名		

その他の多くの子は、おいしかったとか、また食べたいなどの記述が多かった。また、中には、次のようなことを書いている子もいた。「やさいをうえて、きゅうしょくじかんに出して、みんなで食べたいです。」

以上のように、子どもたちの意識の中には、「野菜を育てよう。」という本単元のめあては喚起されたと思われる。

②「くさや木のはであそぼう」での一年生との約束の中でめあてを喚起させる方法は、子どもたちのめあてを確実なものにするには、大変有効なものである。一緒に給食をするのも大変楽しいことであるが、その食事の中で、一年生に遊びを教えてあげると約束することは、自ずから、その後の活動は真剣にならざるをえない。このことは、その日の子どもたちの生活日記の中にも、このことをたくさん書いているところからもわかる。

六月二十六日 (月)

きゅう食時間、一年生といっしょに食べました。わたしは一年二くみで食べました。名前はきかなかつたけど、となりのせきの一年生の女の子と、「こんどいっしょにあそぼうね。」と話をしながら食べました。きょうは、パンのふくろをむすんであげました。こんど会った時はちゃんとわたしの名前をいって、一年生の子の名前をききたいです。

③「おにぎりパーティーをしよう」のTV利用の方法は、子どもたちのめあてが直接、間接的に映像として現れるので、子どもたちのめあて意識は喚起しやすい。しかし、視聴後、発展的学習を構成しないと、めあて意識までには至らず、受身の視聴に終わってしまう傾向がでてくる。

この時間の子どもたちの自己評価カードを分析してみると、次のようになる。

「きょうのべんきょうはたのしかったですか。」の項目 (38名中)

たのしかった	36名	ふつう	2名	おもしろくなかった	0名
--------	-----	-----	----	-----------	----

また、授業中の子どもたちの発言の中に、「おにぎりがつくりたい、おにぎりパーティーがしたい。」という発言が多くみられたことから、めあて意識を喚起しやすい方法だと思われる。

### (2) 集団とのかかわりを多面的にした授業構成

①級友とのかかわりのなかで、子どもたちがどのような意識を持ったか、「くさや木のはであそぼう」の単元の第二次の第1時「くさぶえをふこう」の子どもたちの自己評価カードを分析してみると、次のようになる (39名中)

たのしかった	36名	ふつう	2名	おもしろくなかった	1名
--------	-----	-----	----	-----------	----

また、「先生への手紙」の記述のなかにも、「友だちに教えてあげて楽しかった。」「友だちに教えて

もらってうれしかった。」という、級友とお互いに支え合っている内容もみられた。

② 一年生とのかかわりにおいて、子どもたちの意識はどうであろうか、「やさいをたべよう」の単元で考察してみると、次のようになる。第二次の第7時「パーティーをしよう」の時間の自己評価カードで調べてみた結果がこれである。

「きょうのべんきょうは、たのしかったですか。」の項目（38名中）

たのしかった 37名                      ふつう 1名                      おもしろくなかった 0名

この自己評価からもわかるように、子どもたちは、この活動に十分満足していることがわかる。

また、右の生活日記からもわかるように、一年生のパートナーといっしょにすわり、そのパートナーに出し物を見せる。そして、その後自分たちの作った料理をパートナーに食べてもらうということは、子どもたちにとっては大変満足感と充実感のある、子どもたちの生きた時間であった。この日の生活日記のなかにはこのような文がたくさん記述されていた。

九月二十一日（木）

四時間目の生活の時、やさいパーティーをひらきました。一年二くみに行って、わたしのパートナーの〇〇さんといっしょにしのめホールに行きました。すわる時も、一年生のよこにすわりました。一ぱんが紙しばいをしている時、わたしたちもじょうずにできるかなあとと思って、しんばいでした。わたしたちの番が来て前に出た時、胸がどきどきしました。みんなじょうずにできてよかったなあとと思います。出しものがおわってりょうりを食べる時、とり合いをしました。あっという間に食べものはなくなりました。きゅうりのしおづけがおいしかったです。

③ 同学年とのかかわりにおいて子どもたちの意識はどのように変化してきたか、生活日記の記述を調べてみると次のようになる。

十一月二十一日（火）

きょうは、楽しい楽しいおにぎりパーティーでした。二回目だったので、みんなとてもじょうずににぎっていました。わたしも、家でだいぶれんしゅうしてきたので、形もよくなったし早くにぎれるようになりました。ぐは、わたしの大好きなたらことこんぶとちりめんじゃこです。わたしがつくったのを〇〇くんと〇〇さんが食べてくれました。わたしも二人のをもらって、食べました。〇〇くんのは、かわっていて、中にほしぶどうが入っていました。〇〇さんのは、中に何も入ってないけど、まわりにシャケとのりがまぶしてあって、とてもきれいでした。むすびを作っている時気がついたんだけど、△△くんは、男の子なのに、とてもじょうずににぎっていました。ちょっとびっくりしました。とっても、とっても楽しい、パーティーでした。また作ってみたいです。

このように、同学年のともだちのおにぎりを、お互いに食べあう。ほくの食べてくれた。私の食べてくれた。こういう事によって、一人一人のこどもたちが生かされてくる。

### (3) 授業評価

授業評価としての自己評価カードを分析してみると、次のようなことがわかった。

「きょうのべんきょうは」という項目を「おもしろくなかった」と評価した子どもの記述をみると、そう記述した原因の多くは、他人とのトラブルであることがわかった。これらの事からみれば、この自己評価カードは授業そのものと、それをとりまく集団の二面評価できることがわかる。

参考引用文献

・弘法泰英 第38回日本理科教育学会中国支部大会発表資料 1989年